

五月の女王

アルフレッド・テニソン

上田エリヤ訳

早く起こして、早く声をかけて、早く声をかけてね、愛する母さん／
明日は、どんな嬉しい新年よりも幸せな一日になるわ／
どんな嬉しい新年よりもよ、母さん、一番気が狂いそうな、一番楽しい一日になるわ／
だつて私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

みんなが言うの、黒い、黒い目の娘はたくさんいるけれど、私の目が一番輝いてるって／
マーがレットやメアリー、ケイトやキャロラインもいる／

でも、小さなアリスほどきれいな娘は国中さがしてもいないって、
だから私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

一晩中ぐつすり眠るわ、母さん、私絶対起きないわよ、

だから夜が明け始めたら、大きな声で私を呼んでね／

だつて、私きれいな花とつぼみの束と、花の冠を作らなきやいけないの、
だつて私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

谷を登ってきたとき、誰に会ったと思う？

ロビンがハシバミの木の下の橋に寄つかかってただけよ。

あいつね、母さん、昨日私が睨みつけてやつたことを気にしていたわ、
でも私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

白い服を着てたから、母さん、私幽霊だと思われたのよ、
だから私、まるで稻妻みたいに、何も言わないであいつの横を走り抜けてやつたの。
残酷な心の持ち主だって言われるけど、私そんなこと気にしない、
だつて私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

みんなはあいつが愛のために死んでしまうと言っているけど、絶対にそんなことないわ／
あいつの心は壊れてしまいそうらしいけど、母さんーそれ私のせいかしら?
夏の日には大胆に口説いて来る若い人はいくらでもいるわ／
そして私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

小さなエフィは明日、私と緑地に行くの、
そして母さんもそこにいて、私が女王をつとめるのを見るの／
若い羊飼いたちがあちこちから、遠くからやってくるわ、
そして私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

ポーチの周りにはスイカズラが波打つような木陰を作ってるわ、
そして牧草地の小さな谷の横には、かすかに甘く香るタネツケバナが揺れてる／
そして野生の沼マリーゴールドが、灰色の沼地や窪地で炎のように輝いてるわ、
そして私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

夜風が行つたり来たりしててるわ、母さん、牧草地の上を、

そして、その上の幸せな星たちは、風が通り過ぎるたびに輝いてるみたい／
明日は一日中、一滴の雨も降らないわ、

そして私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

谷中が、母さん、爽やかで緑で静かになるわ、

そして、エンコンソウとキンポウゲが丘一面に咲いてるの、

そして、花でいっぱいの谷間の小川が、楽しそうにきらきらと輝くわ、
だって私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

早く起こして、早く声をかけて、早く声をかけてね、愛する母さん／

明日は、どんな嬉しい新年よりも幸せな一日になるわ／
どんな嬉しい新年よりもよ、母さん、一番気が狂いそうな、一番楽しい一日になるわ／
だつて私五月の女王になるの、母さん、私五月の女王になるのよ。

ニューアイデーズ・イブ

起きたら早く声をかけてね、声をかけてね、愛する母さん、
嬉しい新年の太陽が昇るところを見たいの。

私の最後の新年になるんだから、

そして私はお墓に入つて、もう誰も私のことを考えなくなるの。

今日、私太陽が沈むのを見たの。

楽しかった年、楽しかった時、そして私の心の安らぎを残して沈んで行つたわ／
そして母さん、もうすぐ新しい年が来る。

でも私はもうサンザシの花を見ることも、新緑を見ることもないの。

五月には一緒に花の冠を作つて／一緒に楽しい一日を過ごしたわね／
緑地のサンザシの下で、私五月の女王になつたの／

そして、みんなでメイポールの周りやハシバミの茂みで踊つたわね、
背の高い白い煙突の笠の上に北斗七星が出るまで。

丘のどこにも花はなくて／窓ガラスには霜が降りているわ。

マツユキソウがまた咲くまで生きていきたいだけなの／

雪が溶けて、太陽が高いところに顔を出してくれないかしら／
死ぬまでに一輪の花を見たい。

榆の木が風に揺れて、巣を作つていたカラスがカーカー鳴くでしょう、
そして使われていない牧草地で、チドリの群れがピーピー鳴くでしょう、
そして夏になると、ツバメはまた波打つ草原の上に戻つてくるでしょう、
でも私は一人で、母さん、朽ちていくお墓の中に寝ているの。

聖堂の窓に、そして私のお墓の上に、

早い早い朝に、夏の太陽が輝いて、

丘の上の農場の赤い雄鶏がまだ鳴く前には、

母さんは暖かくて、眠くて、世界中が静かなの。

暮れていく空の下に、母さん、また花が咲く頃、

夜になつても長い灰色の烟にいる私を、母さんが見ることはもうないわね／
乾いた黒い丘から、夏の涼しい空気が
エンバクやスゲ、淵のガマに吹き下ろす頃。

サンザシの木の陰に、母さん、私を埋めてね、

そして時々来てね、私が眠っているところに会いに来てね。

忘れたりしないわ、母さん、母さんの足音を聞いてるわ、
長くて気持ちいい草の中を、私の頭の上を歩く足音を。

お転婆でわがままだつたけど、もう許してくれるよね／
キスして、私の母さん、そして行く前に私を許してね／
だめ、だめ、泣いちやだめ、悲しみを荒立てちやだめ／

私のことでくよくよしないで、母さん、子供はもう一人いるじゃない。

できることなら、また来るわ、母さん、私のお墓から／

私のことは見えないでしようけど、私母さんの顔を見ているわ／
一言も話せないけど、母さんの言葉を聞いているわ、

そして母さんが私は遠くに行つてしまつたと思う時、いつも、いつもそばにいるわ。

私が永遠のおやすみなさいをしたときには、おやすみなさい、おやすみなさい、
そして、私が家の外に運び出されるのを母さんは見るの、

私のお墓が緑に覆われるまで、エフィには会いに来させないで。

あの子は母さんにとつて、今までの私より良い子になるわ。

あの子は穀物倉の床で私の庭道具を見つけるでしょう。

あの子にあげるわ、あの子のものよ／私はもう庭仕事をしないんだもの／
でも私がいなくなつたら、私が居間の窓の外に植えたバラの木と
箱に植えたモクセイソウの世話をしてくれるように言つてね。

おやすみなさい、素敵な母さん／日が昇る前に声をかけてね。

横になつたまま一晩中起きてるつもりだけど、朝には眠くなつちゃうわ／
でも、私嬉しい新年の日の出を見たいの、

だから、目が覚めたら声をかけてね、早く声をかけてね、愛する母さん。

結び

もつと早いかと思つてた、でも私はまだ生きてる／

野原では、そこら中で子羊が鳴いているのが聞こえる。

新年の朝がどんなに悲しかつたか、私は覚えてる！

マツユキソウが咲く前に死ぬと思つてたけど、今、スミレが咲いている。

ああ、空の下に咲き始める新しいスミレはすてき、

そして若い子羊の声の方が、立ち上がりれない私にはすてき、
そして大地のすべてと、咲き乱れる花々はみんなすてき、

そして死は、行くのが待ち遠しい私にとつて、生よりもはるかにすてき。

最初はとても辛かつた、母さん、幸せな太陽の下から出て行くのは。
でも今、そこに居続けるのは難しいみたい、でも神様の御心なの！
でも、私が解放される日はそう遠くないと思うわ／

そう、あの善い方、牧師さまのお言葉で心が落ち着いたの。

ああ、あの優しい声と銀色の髪に祝福あれ！

そして、天国でまた私に会うまでのあの方のすべての人生に祝福あれ！

ああ、あの優しい心と銀の頭に祝福あれ！

ベッドの横にひざまづいて下さるあの方を、私何度も何度も祝福したの。

あの方は私にすべての罪を教えて下さって、すべての慈悲を教えて下さったの。

今、私のランプは遅れて灯されたけれど、神様は中に入れて下さるの／

だから、私もう元気になんかならないわ、母さん、もしもう一度そうなれたとしても、
だつて私の望みは、私のために死んでくださつた方のもとに行くことだけなんだから。

犬の遠吠えも、母さん、シバンムシの声も聞かなかつたわ、
夜と朝が出会うころ、もつとすてきなしるしがやつてきたの／
ベッドの横に座つて、母さん、私の手を握つて、
反対側にはエフイが座つてね、私その話をするわ。

荒れた天気の二月の朝、私天使たちが呼ぶ声を聞いたの／
月が沈んで、暗闇がすべてを覆つていたときだつたわ／
木々がささやき始めて、風が巻き始めた、
そして荒れた天気の三月の朝、私の魂を呼ぶ声を聞いたの。

横になつてたけど目はすつかり覚めていて、私母さんと愛するエフイのことを考えてたの／
もう私がいない家にいる母さんのことを思つたの／

私全身全靈をあげて二人のために祈つたわ、そして神様にお任せすることにしたの、
そのとき、音楽のうねりが風に乗つて、谷を駆け上つて来るのが聞こえたの。

空耳だと思つたわ、ベッドの中で聞いたんだから、

そしてそのとき、私何かを言われたのー何を言われたのかはわからない／

大きな喜びと震えで胸が一杯になつたわ、

そして谷を上つて、もう一度風に乗った音楽が聞こえてきたの。

でも母さんは寝てた／そして思ったわ「私にしか聞こえないんだ」つて。

そして、それが三回来たなら、しるしだと思ったの。

そしてそれはまた、窓枠のすぐそばまでやってきて、

そして、そのまま空まで上つて行つて、星の間に消えて行つたの。

そう、その時が近づいていると思うの、そう信じてる

私の魂が行かなきやいけない道には楽しい音楽が流れているの。

私なら、本当に、今日行つてもいいの／

でもエフイ、私がいなくなつたら母さんを元気づけてあげてね。

そして、ロビンには優しい言葉をかけてあげて、くよくよしないでつて言つてあげて／
私よりもあなたを幸せにできる人はたくさんいるわって。

もし私が生きていたら—言えないけど—あいつの奥さんになつてたかもしれない／
だけど、それももう終わつてしまつたこと、私の人生の夢と一緒に。

ああ、見て！太陽が昇り始めて、空が輝いてる／

百の野原が照らされてるの、その全てを私は知ってる。

そして、そこで私が動き回ることはもうないの、そしてそこには太陽の光が輝くでしよう—
谷間に咲く野の花を摘むのは、私じゃない誰かの手なの。

ああ、すてきで不思議なことみたい、今日という日が終わる前に

今話している声は、太陽の彼方に行ってしまうのかしら—

いつまでも、いつまでも、正しい魂たちと真実と一緒に—

だけど、人生って何なの、どうして嘆き悲しむの？どうしてこんなに苦労が多いのかしら？

いつまでも、いつまでも、ずっと楽しい天国にいて—

そして、そこで少しの間、母さんとエフィイが来るのを待つてるの—
母さんの胸に抱かれるように、神様の光の中に抱かれてるの—

そこでは、悪い人は苦しまなくなつて、疲れた人は休ませてもらえるの。